

欧州視察報告＜6＞

視 察 項 目	高齢者・障害者に対する福祉の取り組み
視 察 日 時	2009年11月12日（木） 午前10時00分～12時00分
視 察 先 名	高齢者向け住宅型ナーシングホーム ミドルセックス・マナー・ナーシングセンター
説 明 者	MS. SONIA VERZOZAS
担 当	青木 功雄

【視察に先立って】



センター前（住宅街の中にある）

事前説明を受ける視察団



【はじめに】

文明が進み、科学が発展する。科学の発展により、様々な利益を享受し生活が豊かになることは、自明の理である。しかしながら、結果としてその利益の裏側では、いくら文明が進んだとしても、いくら科学が進んだとしても、すべての問題が解決できないことも真理である。

その際たる現象が、高齢化社会であり、医療・介護の問題だ。この度、介護の視察研修で訪問した国は、英国・イギリス。日本と同じく島国であり、王室もあることから共通点が多い国である。とりわけ、イギリスの首都ロンドンと日本の首都東京は、経済的にも同一水準を維持しており、私たちが住む川崎も、その首都圏として発展を遂げているという意味では、非常に共通点も多く、首都圏の生活観を比較文化し、研究するという意味では、非常に有意義な研修場所であった。

今回の視察先である介護施設は、ロンドン近郊のウェンブリーに位置する MIDDLESEX MANOR NURSING CENTRE (ミドルセックス・マナー・ナーシングセンター) (以下「MMNC」) で、研修の条件として、本市と似通ったところがあり、川崎市議会の議員視察団にとっては願ってもない視察先となった。改めて、視察を受け入れていただいた訪問先には、敬意を表したい。

今回は、介護施設を単なる施設として視察するのではなく、この施設が自宅と同じような住環境を目指す取り組みをしている点に注目しながら、介護制度、施設の利用料金、職員へのセクハラ問題など、日本の介護現場で起きている問題と比較研究してきた。また、特記事項としてあらかじめ記しておきたいことは、「職員の外国人化」ということである。これは、本市のみならず、今後、国全体の問題として少子高齢化を見据え、さらに議論が高まるであろう外国人介護者の現状をまざまざと見せてつけられる結果となった。報告書の文面だけでは、現地の臨場感が伝わってこないのが非常に残念であるが、介護される人は白人で、介護する人は白人でない、それが、我々視察団が現場で見た光景だった。介護という様々な現場の問題点や外国人介護者の活用という視点も踏まえて、報告書を考えて頂きたい。

【ナーシングホームの概要】

◎ 施設について

ロンドン近郊のウェンブリーに位置するナーシングセンターです。認知症、回復期、症状緩和、パーキンソン病、一時療養等のケアを行っている。その他のサービスとして、理学療法、アロマセラピー、足治療、リグレクソロジー、理髪、言語療法、作業療法、レクリエーション療法、日々の活動、定期的な外出、住民や親戚の会合なども行っている。

この3階建ての施設は、高齢者以外の身体障害者ケアも行っており、ベッド数は83床で、テレビを見たり、リラックスできるラウンジも5室あり、東屋がある庭園を備え、午後の日差しを十分に満喫できます。



ナーシングホームの施設正面玄関にて

◎ 設立の背景

ヨーロッパ先進諸国では、老人ホームなどの高齢者の居住環境は、病院のような施設であるべきではなく、あくまでも住宅でなければならないという考え方が行き渡っている。その背景には、自由を束縛された“施設”において、惨めな生活を送らないような認識の高まりが一つ。さらには、高齢化と核家族化によって、こうした“施設”への入居が、かつてのように身寄りのない一部の貧しい高齢者に限られたものではなくなってきたことにあると考えられる。

こうした状況に加え、生活の質を重視する高齢社会学的な見解が

広く一般に共有されるにつれ、これまで“施設”として位置づけられてきた長期介護のためのナーシングホームなども、特別なタイプの“住宅”として造られるべきだと考えられるようになってきている。つまり、ヨーロッパ先進諸国では、我々が高齢者施設と呼んでいる老人ホームなどの長期介護施設も、すべてが“住宅”になってきているのである。

この“施設”から“住宅”へというような流れは、北欧でもイギリスでも共通して見られる。そしてもうひとつ、これらの国々で最近はっきりしてきたことは、こうした高齢者のための特別な住宅を、身体が弱ってきていても、可能な限り長く住み続けられる“終の棲み家”として計画すべきだという考え方である。高齢者住宅を“終の棲み家”へという背景には、在宅介護システムが発展したということも無視することができない。高齢者住宅が単に小さな住宅で、普通の住宅でも受けられる程度の介護ニーズにしか対応していないのであれば、その社会的ニーズは限られているからである。高齢者のための特別な住宅であるからには、高い介護ニーズに対応した“終の棲み家”であることが求められるようになったものと思われる。



設立の背景についてメモを取る視察団員

【MMNCの概要】

◎ 施設の人員について

現在は75名の入居者に対して、各フロアに看護師2人、介護スタッフ5人の総計21人である。この人数には事務や掃除、料理などに従事する人数は含まれていない。スタッフはシフト制で、介護専属になっている。

◎ ビジネス構築について

もともとは、アソシエーションであるナーシングサービスという団体が運営する高齢者施設のあった場所で、インドの方が所有していた。2005年に保険会社のbupaが買い取り、そのまま高齢者施設として運営し、3か月前からbupaの標準に合わせた内装工事を始めた。ミドルセックス・マナーは、テムズ・バレー・ユニバーシティという大学付属の施設でもある。bupaは英国内にナーシングホームを300ヶ所、スペインにも50ヶ所ほど所有している。

◎ NVQ (ナショナル・ボケーショナル・クオリフィケーション) について

全国的な資格制度で、イギリスでは少なくともこのような施設で働く人たちの50%は、NVQのレベル2までの資格を持った人でなければならないという規則がある。これは2000年以降の制度で、それぞれのレベルでどの程度のこと出来なくてはならないか(あいさつの仕方など)細かく定められている。

◎ NHS（国民医療制度）について

イギリスのNHS（国民医療制度）の予算削減により、2007年以来、病院の統合が行われている。このため、より給料の高いオーストラリア、カナダ、中近東などへ医師が流出しており、看護師も不足気味となっている。



国民医療制度について説明を受ける視察団員

◎ 介護費用の負担事例

料金を払えない方には政府の補助があるが、1週間で700ポンドから1500ポンドほどになっている。

◎ 器具の説明

入所者の方を移動させるときは、ホイストと言って、天井にレールがいないストレッチャーを使用する。英国には、ヘルスアンドセーフティレギュレーション（保健安全法）に定められている背中と腰を保護しなければならない。



ストレッチャーの説明



器具の説明

【質疑・応答】

Q 1 : お風呂に入れる作業は大変だと思われるが、その際、日本で問題になっているのが、入所者の職員に対するセクハラ行為である。この施設では、どのような対応をされているか。



質疑をする視察団

A 1 : この施設にも同じ問題はあるが、我々は、このような行為を未然に防ぐため、次のような対応を行っている。もし、新しく入所する方がいるとすれば、自宅へうかがったり、入院先の病院へ行って、どの程度の介護が必要か審査している。それは、看護師の資格を持っているソニアさんの仕事で、入所基準に適していないときは、入所を断る権利がある。特に今年は、ケアを受ける人も世話をする人も守られなければならないという新しい法律ができた。いかに高額の入所費用を払ったとしても、その人だけ面倒を見るわけにはいかない。両者にとって、すべての人にとって、良い結果を出すような審査をしなければならない。

Q 2 : 現在、この施設への入所希望者と施設で働きたいという方はどのくらいいるのか。

A 2 : いつも10名程度の入所待機者がいる。しかし、ショートステイに訪れる方のために、余裕を持たせている。また、施設で働く人たちの半分程度は、NVQ（ナショナル・ボケーショナル・クオリフィケーション）といわれる全国的

な資格を持っている。例えば、水道工事の資格であったり、
こういう施設で働くための技術であったり、いろいろな技
術のレベルがあるが、少なくともNVQのレベル2までの
資格を持った人がいなくてはならない。これは、2000
年以降続いている。もちろん、看護師には資格があるので、
その範疇外になっている。施設で働くことを希望する人は、
その資格を持っていれば、給料もいくらかではあるが良
くなるので、希望者は結構います。ここはロンドンという大
都市がすぐ背後にあるので、今までのところ、スタッフが
不足しているという問題には直面していない。

Q 3 : 入所者の家族や地域の方々との交流は、どのように行わ
れているのか。

A 3 : どの国も同じであると思うが、古い世代と新しい世代
とのギャップが非常に大きい。それを克服するための努力
はしている。例えば、小学生や高校生を施設に招待したり、
入所者の方をキューガーデンズや植物園、それからロンド
ンアイなどの観光地のほか、地元の学校に連れて行くこと
もある。

そして、ここを1つの地域社会とみなして、入所者の家
族を招待し、カラオケ大会を開いたりすることもある。ま
た、ここで働く人達はフィリピン人だけではなく、ナイジ
ェリア人であったり、カリブ海の国々から来ている人達も
いる。時より、自国の衣装をまとして、歌を歌ったり、踊
ったり、食べ物を作ったりしながら交流を深めてす。また、
それぞれの国の独立記念日には、自国の衣装を着たりする
ようなこともしている。

Q 4 : 施設の利用料金を決める基準は、どのようになっているのか。

A 4 : 施設にチャージする料金は、介護をどの程度提供するかによって決まる。支払方法は、全額または一部社会保障にするかで、入所者の経済状態によって決まる。

Q 5 : 自治体からの支払はあるが、入居者の収入が低く、介護の度合いが高いという場合はどうするのか。

A 5 : 過去の経験から、そのような人がいる場合は、持ち家があれば家族を含めて相談し、家売って介護費用に充てている。もし、他の支払手段があればそちらを優先させるが、いかなる手段もない場合には、自治体が弁護士などの関係者を集め、その人に対して最善の策を取っている。そして、自治体が援助しなければならない場合には、当然のことながら自治体が負担することになる。

Q 6 : 少なくとも、この施設の1週間の最低料金700ポンドとうかがったが、収入が見込めない場合は受け入れできないことになるのか。

A 6 : 収入がないからと言って、すぐに断ることはしていない。その時点で、家族を呼んだり、自治体の社会福祉部に行って相談を受けたりするようアドバイスしている。

Q 7 : 常時、何人ぐらいの入所者がいるのか。また、スタッフは何人体制か。

A 7 : 現在、75名の入所者がいるが、ちょうど入所者の審査

が終わったところで、10名ぐらい待機している。したがって、常時、70から80ぐらいの入所者がいる。また、スタッフ体制は、各フロアーに看護師が2人、介護スタッフが5名で、総計21名。スタッフの数は、介護をする人たちの数で、清掃や事務の人員は含まれません。その他にパートタイムの仕事で、事務、掃除の人やキッチンの人まで全部含めると100名ぐらいになる。

Q 8 : このような施設を造るとき、施設のマネジャーとしては、家のような感覚であればすばらしと思うが、施設のような感覚になってしまうことへの苦労はあるのか。

A 8 : それは、入居者の方から見た感覚です。例えば、部屋へ入るときに、ただドアを開けて入ったりせず、ロックするなどのケアプランが入所者1人1人に作られています。ケアプランは毎日見直ししているので、看護師にとって大きな仕事となっている。まず、ここに来る前に、どの程度のことを期待しているかを聞き、期待が大き過ぎてがっかりさせないようにします。家でもそうですが、1人住まいの高齢者にとってはとても寂しいところだと思います。この施設でも、にこにこ笑っているスタッフが、いつも手を貸してくれたとしても、寂しく感じる人がいます。そういうことをわかっていただいた上で入所していただいています。ですから、ソニアさんが入所者の方のケアの程度などを審査するときには、そういうことも含めて、すべて聞き出します。ケアプランがあるからこそ、問題が文字になって出てきます。文字に残しておかなければ、その問題は解決できないかもしれないので、そのためにケアプランが毎日見直しされています。入所審査のときに、その方が食事をどの程度、自分で取れるかを記録に残したり、糖尿病がある

とか、食べ物はやわらかい食べ物でなくてはいけないとか、すべて細かくケアプランに書かれています。

Q 9 : 食事代は、どのくらいになるのか。

A 9 : b u p a の施設全体で利用する材料を、大量に購入します。それを施設に分配して、調理は施設で行います。食事の内容は、その人がどういうものを食べるかによって決まるので、一概には言えませんが、1回あたり3ポンド50ぐらいです。

Q 1 0 : 入所者75名のうち、医療保険や個人で払うことができず、公的な支援を受けている方はどのぐらいいるのか。

A 1 0 : 70名。ほとんどです。社会福祉部が100%の料金を負担してくれます。その人が、どの程度のケアを必要とするかによって決ってきますが、施設としては、公的資金が90%です。

【統括】

本市は、人口が140万人を超え、市制施行85年目を迎えた。そういう中で、高齢者の施設については、ますます重要度が高まってきたことは言うまでもない。今回の視察研究で、英国介護の仕組みや各施設の取り組みを調査することによって、本市における高齢者福祉のあり方を習得できたことは、視察団にとって大変有意義なものとなった。とりわけ、熱心に介護の必要性や大切さについて説明してくださったフィリピン出身のソニアさんが印象的だったと、視察団全員が口を揃えて話していたことは、特筆するべきではないだろうか。なぜそのような印象を受けたのかは、一概には言えないが、分析すると①外国人介護者ではあるが介護についてしっかりと勉強していること②「プライドを持ってやっている」と力強く説明してくれたことが、非常に良かったからであろう。人間相手の仕事だけに、そのような英国の介護教育システムについては、見習うべきところがある。それが、施設を住宅へと変化させているひとつのキーポイントなのだと思う。

この意識付けに大きく関係している外国人介護者を受け入れる仕組みについて少し触れるが、フィリピンや諸外国から英国の介護学校へ入学を促し、そこで3～4年間、しっかり語学と介護の勉強をした後、介護施設で働く場所を提供している。そうすることによって、文化の壁を越え、生き生きと介護の現場で働くことができるようになると思う。最後になるが、改めて、視察を受け入れて下さったMMNCの皆さん、特に説明をいただいたソニアさんに感謝を申し上げますと同時に、今後さらに本市が体験すると思われる急速な高齢化社会の中で、重要度を増す介護施策をより発展させるために、今回の視察研究を生かしていきたいと考えているところである。



MMNCの外観



次の視察先へ向かう視察団